俺と幼馴染

糸目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と幼馴染

【Ｎコード】
Ｎ３８７２Ｆ

【作者名】
糸目

【あらすじ】
くそ忌々しい俺の幼馴染。ハイスッペクな容姿に陽気な性格を携えて、いつもあいつは世界の中心にいた。届かなかった手に俺は後悔すべきか。いつものように溜息を吐く、麗らかな日。

クラス替え。

中高生の間で年を上げる度に起こるこの行事は、正直学生にとって、今後の運命を左右するといっても過言ではないほどの重大イベントなわけである。

青春を薔薇色に染めるか、四方の隅まで黒く染めるか。

全てはこの『クラス替え』に掛っているのだ。

人生五十年と言わず八十年が平均寿命と相成った長寿大国日本の国民といえど、一年など取るに足らずと思うことなかれ。

たかが一年。されど一年。

学生の一年というのは思うに大人になってからの十年と同じだけの重みを持っていると思うのだ。もちろんまだ十六歳の身空で何を知ると思われるかもしれないが、たぶんこれは大人になっても変わらない意見かと思う。

それが来年に受験を控える高校二年という身ならばなおさら。青春をとびきり味わえるのは今年が最後。ゆえにこの年のクラス替えはかなりの死活問題なわけでして。

まあとりあえず、何が言いたいかと言えば。

俺の青春、終わった。

春を迎えたはずの時候に肌寒い風を頬に感じながら、俺はぼんやりとそのクラス替えの掲示板を見上げていた。風のせいか滲む視界に、俺ともう一人の名前だけがやけに克明に映る。

周囲から上がるのは、喜びと感嘆と、わずかに交る落胆の声。しかし、それでも大概は、どいつもこいつもこれからの一年に希望を寄せていることだろう。

例え仲の良かった友人と離れてしまった人であろうと、次のクラスでの出会いに不安と綯い交ぜになった期待を持っているに違いない。

だがしかし。

だがしかし、俺にそんな希望はなかった。ただただ笑うしかない。あはははははははは。周囲の視線に口を閉じた。笑えないし。

今見た俺のクラス――2年D組に、仲の良い友人はいた。親友とも呼べるやつである。小学校からの古くからの友達で、まあだからクラスではぶれてしまう心配はないだろう。付け加えるなら幸いにして、まだイジメというものを味わったことがないために、それが理由でこうも憂鬱というわけでもない。

ただ一つ、掲示板に張り出された名前が俺を絶望の淵へと追いやったわけだ。

高梨優。

俺の幼稚園からの『腐れ』縁。

幼馴染と呼ぶ存在。

できればもう顔を合わせたくもなかったそんな彼女は――。

「やっほー、ホッシー！」

バシン、と激しい音がどこからか聞こえた。どこから、というのは、俺の体のどこから、という意味。たぶん第一腰椎辺りが損傷していることかと思う。至急、救急車プリーズ。

「……死ねばいいのに。いっそ死ねばいいのに」

「暗いよ！　もう、相変わらず暗いよ！　学年の始めくらいもっとテンション高く行こうよ！」

にっこにっこ笑う金髪ピアスの美少女。もとい、俺の幼馴染、高梨優。

素行の悪い生徒丸出しの容貌だが、なぜかあまり不良というイメージを持たない。それもこの寒さに負けずに膝丈ほどしかないスカートからスラリと伸びたモデル顔負けの生足のせいか、化粧っ気を感じられない顔立ちがそこらのアイドル顔負けの美貌を持っているせいなのか、その辺りは判然としない。

しかし正直俺にとってはそんなことはどうでもよくて。

見慣れた美貌からは曇りのない笑顔。見なれぬ生徒からは好奇の視線。

ああ、何かもう煩わしいっていうか、うるさい。騒がしい。耳触り。

「もっと音量下げろよ。耳痛ぇし、さらに背中は重傷だ」

「あっはっは！　ごめん！！」

こいつ、わざとか？

何てことは考えるだけ。本当は悪気のないことぐらいちゃんとわかっているし、こいつがこんなにテンション高い理由も知っている。

わかってしまうのだ。嫌だね。幼馴染って。

「ところで、ねえ！　掲示板見た！？」

「……見た」

「私、また栄治と一緒だったよ！　三年間一緒のクラスっ。すごいよね！　やっぱり運命感じちゃうよ！？」

「そりゃよかった」

ちなみに栄治、フルネームで荻原栄治というのはさっき言った俺の親友のこと。そして補足するなら、この忌々しき幼馴染――高梨優の恋人というやつである。

「あ、そういえばホッシーとも同じクラスだったね。もう驚くこともなかったけどさ、何か十一年間同じクラスってちょっと怖くない？　今度お祓い行ってみることを真剣に検討しているんだけど、どう思う？」

「釈然としないのは何でだろうな」

ウソウソぷー。また宜しくね！　と再び叩かれる背中。痛い。

なぜ学ランの上からのビンタでこうも大ダメージを負ってしまうのか。今度の学会での研究テーマにすべきではないだろうか。高梨優の未知なる生体について。嫌だな。スクリーン一杯にピースして映る優を想像してしまった。

「それじゃあ、クラスに行こうか。栄治も多分クラスで待っているだろうし」

「……」

無言の俺にも気付かず、優はそのまますたすたとその長い足で人ごみを縫って歩いていく。避ける素振りすら見せずに一本の芯が入ったかのごとく背筋を伸ばして歩くその姿は、まるでここがファッションショーの会場にでもなったかのような錯覚を受ける。陽の光はスポットライト。周囲は観客。ちらりちらりと横目で優を窺うのは何も男子だけでない。

その数歩下がった後ろから俺は優の後を追う。観客すらに成り得ない俺は、押し合い、圧し合いの中で、とてもではないが優の優雅さの欠片もない。今さら何とも思わんが。居る世界が違うというだけの話だ。そんな相手が幼馴染というポジションにいることを、俺は恨めばいいのか、泣けばいいのか。

思えば、この立ち位置も見慣れたもんだ。小さい頃から、背丈が変わろうと見つめる彼女の背中は変わらない。そしてこの立ち位置も、結局大人になっても変わらない。

俺はいつも優の後ろを歩くだけ。

顔を上げれば、ほら。横には違う誰かが歩いている。

「栄治！」

誰が聞いてもわかる。喜びに甘えというトッピングを加えたその声は、恋人に向けるためのもの。

これで俺が優の彼氏疑惑という不名誉な称号を受けて、二年の始めから他の男子諸君より遅れてスタートを切ることはなくなったわけか。去年の一学期は噂を抹消することに翻弄されていた気がするし。

ま、俺がそんなことをしなくても、優の態度と恋人が誰かを知ればそんなつまらない噂は自然に消えていっただろうけど。

ちなみにこれ、俺に恋人がいない言い訳とかじゃないんで、そのあたりよろぴこ。

「よお」

下駄箱にいる親友に片手を上げる。ポケットから出された手は冷たい外気に晒されて、幾分温度を失ったようだった。栄治がこちらを見たのと同時にポケットに再び手を戻す。栄治は何の臆面もない優と似たような笑顔で俺を出迎えた。その横には、春休みという間を開けて出会えた恋人に喜びを隠せない優の顔。てか、どうせデートとかして毎日会っていただろうが。

「また同じクラスだな」

そよ風が吹くほどに爽やかな笑顔を浮かべる荻原栄治。我が学校の弱小野球部、期待の新星。弱小とはいえ、一年のうちからマウンドに立ち、甲子園にまで我が校を導いたその伝説は今も語り草となっている。

短く刈り込んだ髪にきらりと輝く白い前歯。身長百八十に届く身長のうえ、スポーツ選手特有のガタイの良さ。イケメンもかくやというその面は、正直男の俺から見ても格好いい。

簡潔にまとめればあれですよ。こいつ、生まれた時から超勝ち組。けっ。

「たまに俺はお前の友達をやめたくなるよ」
「何で！？　つか、いきなりだな、おい。新学年早々それかよ」
「ホッシーは妬いているだけだよー。ほら、こんなに可愛い幼馴染が親友にいちゃついているもんだから」
「……は」
「鼻で笑った！？　こいつ、鼻で笑いやがった！？」

どうどうと宥める栄治に、鼻息荒く唸る優。そんな二人から目を逸らして、俺は二人の傍をそそくさと通る。使いなれぬ下駄箱の位置がなぜか酷く不愉快に感じられた。すでに名前のシールが張られているからどこが自分の場所かすぐわかるのだが、何で一番下何だよ。しゃがむの辛いじゃないか。俺の背が低いからって馬鹿にしてんのか、こんちくしょー。

外履きを入れて、用意してあったカバンから上履きを取り出す。仲良く話を進めていた二人に顔だけ振り返っておいた。

「俺は先に行っているよ。『可愛い』幼馴染が、親友といちゃついて、目に毒なもんで。あ、致死性な感じ」
「さっさと行けー。帰ってくるなー、バーカ」

べーっと舌を出す優。いちいち行動がガキ臭い。大人の対応として握りこぶしの甲の部分を優に見せてから、中指をぴんっと突き立ててやった。

「ぎゃあー！　最低！　こいつ最低！」
「じゃあまたな、栄治。遅れるなよ」
「遅れねぇよ」

栄治は苦笑気味に笑って、ひらひらと手を動かした。相変わらずだ、と顔が全てを語っている。それに皮肉気に笑って、俺は階段を上って行った。

背後から聞こえる笑い声は次第に薄れていく。反比例するように俺の顔に色はなくなっていった。

高梨優。

俺の幼稚園からの『腐れ』縁。

幼馴染と呼ぶ存在。

そして、俺の初恋の人。

それは、今も変わらない。

「忌々しいやつ」

儚く散ったセブンティーンに俺はため息をついた。吐いた息は白く染まることなく、しかし底冷えた校舎の中では握った掌もどこか冷たい。階段を上りながら見る窓越しの景色は、散りかけた淡い桃色の桜と黒い学生の姿に埋まっていた。

（後書き）

普段書くことがない恋愛ものを書いてみました。本来連載予定の長編になる予定でしたが、一話完結型になるやもしれず、また筆も微妙なところで止まってしまう。なら割と納得のできた一話だけを載せてみようと短編という形をとりました。批評、感想お待ちしております。感じることがあり、何か残してくださるというのであれば、作者は涙累々でございますゆえ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3872f/

俺と幼馴染

2010年11月21日02時41分発行